



面倒臭い

研究活動を行っていて「面倒臭い」と感じたことは何度あるだろうか。おそらく多くの方々日々面倒臭いと感じているだろうと思う。実験が上手くいかず同じことを繰り返さなければならなくなったとき、意図しない仕事が降ってきたとき、など人それぞれ異なることだろう。筆者は昔、面倒臭いと思うことは労力や時間が割かれることに対して感じるものだと考えていた。その考えに疑問が生じたのはヨーロッパに研究留学していたときだった。

筆者がいたヨーロッパのとある国の研究所は共通設備が充実していた。海外の研究所ではわりとよくあるシステムなのだが、バッファー類は自分で作ることはなく、バッファー作成依頼書というフォームに記入し、提出すると担当者が作成してくれる。記載方法は紙一枚に「1M Tris, pH 7.5, 調整はHCl, 滅菌法はフィルトレーション, 容量1Lを3本, 期限明日まで」といった情報を書くだけである。それまで国立大学で研究を行っていた筆者は、このようなシステムを利用して「なんて楽なんだ、素晴らしいシステムだ!」と感動したのを覚えている。ヨーロッパでは研究者は実験をデザイン・実施して成果を出すのが仕事であり、材料作りや洗い物は専門スタッフに任せた方が効率的だという考え方なのだ。

さて、話を本題に戻そう。筆者にとってバッファー作りは非常に面倒臭いと感じる作業の一つであった。特にpHを合わせる作業は時間がかかる上、バッファーがなくなるたびに行わなければならない。国内のラボでは共通試薬の場合、最後の瓶を開けた人が新しくバッファーを作って補充するシステムをとっているところが多いと思う。それを

嫌がる人たちは最後の瓶に手が付かないよう、残りのバッファーを空にしないようにギリギリの量を使用するチキンレースが開始されるのである。この妙なチキンレースから解放されたことはヨーロッパに来て実感したメリットの一つだったことは間違いない。仮に使用する共通バッファーが少なくなっている、紙一枚を提出するだけで次の日には全て補充されている。まさに革命である。

と思っていたそのときだった。筆者はここでもチキンレースが行われているのを目の当たりにしてしまったのである。実は筆者がいたヨーロッパのラボでは、共通試薬は最後の瓶を開けた人はバッファー作成依頼書に記入して提出する決まりになっていた。ものの5分の作業であり、バッファーを自分で作っていたことに比べるとはるかに楽な作業だ。しかしこの作業すら面倒臭いってチキンレースを行う人がいたのである。筆者は当初とても驚いたのを覚えている。

それから数年が経ち、ヨーロッパでの研究も一段落しそうになり、次のポジションや新しいプロジェクトについて考えながら、今ある実験を進めていた。そのときpH 7.4のHepesバッファーを手に取り、使おうとした。残りが少なかった。次の瓶と合わせて使おう、そう思って保管庫を見ると最後の一本だった。そのとき筆者はふと思ってしまったのだ。これを開けるとバッファー作成依頼書を書かないといけないな、「面倒臭いな」と。筆者は今まで一度もバッファー作成依頼を出すことを面倒臭いと思ったことはなかった。それゆえ自分の感覚に衝撃を受けたのである。ヨーロッパに来た当初はバッファー依頼書を書くことを嫌がる人がいるのに驚いたが、数年後まさに自分がそうになっていたのである。

いったい面倒臭いという感覚は何なのだろうか。研究がいくら効率良く便利になったとしても「面倒臭い」という感覚から脱することは我々には永遠に出来ないのかもしれない。

(トライデント中嶋)